

間野英二著

『パーブル・ナーマの研究』Ⅲ訳注

近藤 治

間野英二氏が一九八三年に『パーブル・ナーマ』の第一部「フエルガーナ章」の全訳を『京都大学文学部研究紀要』第二二二号に発表されたとき、たまたまその年の『史学雑誌』の「回顧と展望」を担当した私は、第二部、第三部邦訳の続編が期待されるとして、「これらが完結すれば、私たちはこれまでのいずれの訳語版をも超えた最良の日本語版をもつことになるであろう」と述べておいた（第九三編第五号、一九八四年）。間野氏の倦むことのない持続的な努力によって邦訳は完結し、私たちは最も信頼のできる最良の訳書を手にすることができるようになった。それが本書である。

間野氏は『パーブル・ナーマの研究』Ⅰ・Ⅱとして、浩瀚な校訂本（一九九五年）と総索引（一九九六年）をすでに公にされている。本書は、原本の形に最も近づきえたとされる苦心の作の校訂本に基づいて、総索引を最大限に利用しながら遂行された日本

語訳ならびに注釈である。その結果、間野氏が「はじめに」で、「本書は少なくとも翻訳の面では、これまでに存在した『パーブル・ナーマ』の翻訳各書の水準をかなり越え、パーブルの記述内容を、原文により近い、より忠実な形で読者に伝ええたのではないかと考えている」と並々ならぬ自信をもって述べているような形で、読者の前に示されることとなった。

本書は、校訂本、総索引と同様に、実に巨冊である。通例の判型よりも大判のB五判にして、七七〇頁に至る。訳注本文の前には英文摘要と解題が配され、後には付録、系図、文献目録、索引が付されている。また地図五葉と図版一一点が本文各所に挿入されている。

解題は、校訂本の序論と併せて読むことによって、一層理解しやすいものとなる。しかしこの解題だけを読んでみても、読者の知りたいと思うことがまるで痒いところに手が届くように、明確に説明されている。とりわけ、二「政治情勢——諸勢力の説明」は、タイムール朝以下諸勢力の興亡する中央アジア史の簡にして要をえた概説となっており、『パーブル・ナーマ』を理解するための政治的背景を知る上で欠かせない。また三「パーブルの生涯」は、『パーブル・ナーマ』本文をもとにして彼の生涯中の諸事跡が細かな項目毎に述べられており、パーブルの簡便な小伝として最上である。

解題四「文人としてのパーブル」のところでは、訳者はパーブルが『パーブル・ナーマ』の他に、少なくとも四種の著作、すなわち『ムバイイン』『韻律論（アルーズ・リサーラス）』『詩集（ディーワーン）』『ワリディヤ・リサーラス』を残していたこ

とを、明らかにしている。さらに訳者は『東洋史研究』第五七巻
第一号（一九九八年）に発表した論文「テヘラン・サルタナテ
イ図書館所蔵の『バーブル著作集』について」において、右の
四種の著作の他に『五〇四のリズム』があることを明らかにする
とともに、この『バーブル著作集』に収められている『バーブ
ル・ナーマ』が、ロシアのスルターノフがいうようなバーブル生
存中の写本では全くありえないことを明解に論駁した。このこと
は、本書の解題でも簡単な指摘はされていた（解題部五一頁脚
注）。

この他に解題では、『バーブル・ナーマ』研究小史』『バーブ
ル・ナーマ』の構成と内容』『バーブル・ナーマ』の価値』
『バーブル・ナーマ』の影響』がそれぞれ順を追って説明され
ている。『バーブル・ナーマ』の価値としては、文学作品として
の価値と歴史の史料としての価値との二重の価値があるとされる
が、とりわけ同時代史の史料としての価値は無限であることが強
調される。また『バーブル・ナーマ』の影響のもとに著された同
時代史的な回想録として、ミールザー・ハイダルの『ターリー
ヒ・ラシーデーイー』、ペルシア語史書の『チョラーズ史』、グル・
バダーン・ベギムの『フマーユーン・ナーマ』、ジャハーンギールの
『トウーズキ・ジャハーンギーリー』等のあることが紹介され
ている。

評書
『バーブル・ナーマ』の本来の書名が『ワカイイー』（出来事、
諸事件の意）であったことは、訳者が校訂本の序論においてすで
に明らかにしていたことであった。ではバーブル自身は本書の中
で、この書物を何と読んでいたのであろうか。翻訳によれば、文

字通り「この書物」と読んでいる場合もあるが（二九頁）、多く
の場合は「この史書」（三一、五五、九五、二四六、三一六、四
〇六頁）と呼んでいたようだ。

『バーブル・ナーマ』は、第一部フェルガーナ（中央アジア）、
第二部カーブル（アフガニスタン）、第三部ヒンドウスターン
（インド）の三部から構成されている。間野氏の明晰な筆致によ
る名訳ということも与って、これら三部の記述内容には興味深い
ところが数限りなくある。だが紙数に制約があるために、今回は
それらの紹介を控えておくことにしよう。

本書の巻末には、付録としてカーヌワーハの戦い、ヒジュラ暦
九三四年関係、九三五年関係、バダフシャーン情勢およびフマー
ユーンの病とバーブルの献身、バーブルの死、の短編計五編が収
められている（六〇九―六二三頁）。アブル・ファズルの『アク
バル・ナーマ』に見えるバーブル関係の記事をチャガタイ語で要
約したものが、ロシアのN・イルミンスキー編の『バーブル・
ナーマ』カザン本（一八五七年）の末尾に収録されており、この
チャガタイ語の文章を訳出したものである。これらの文章は、現
存する『バーブル・ナーマ』には欠けている情報をも提供するも
のであり、参考になるところが多い。系図としては、ティムール
朝略系図、モグーリスターン・ハーン家略系図、バーブル関係略
系図の三つが収められている。これらは本書を読み進むうえで役
立つこと甚だしい。

バーブル及び『バーブル・ナーマ』関係文献目録（六二―九一六
六七頁）は、内外の関係文献を包括的に網羅し、それらを辞書、
文法書、文学史、バーブルの著作、バーブルの著作以外の一次文

献、パール関係二次文献、外国語二次文献、日本語二次文献に分けて整理、紹介しており、本書の価値を一段と高めている。また全体で五〇ページに及ぶ索引（六六九—七一九頁）は、人名索引、地名索引、民族・部族・出身地名索引、事項索引、動植物名索引に分けて配列されており、これまた本書の価値をいやが上にも高めている。これらの索引のうち、例えば事項索引は本書中に含まれる様々な術語を網羅的に整理、配列しているので、これによってそれらが説明されている注記を探して参照すれば、訳者による適切な術語解説集として、辞典的にも活用することが可能である。

二

本書は、望みうる最良の訳者によってわが国の学界と読書界にもたらされたものである。翻訳を行う際には、翻訳者によって解釈の異なりうる、あいまいな表現ないし不分明な表記、あるいは誤記さえもが原文には必ずあるはずである。そういう場合、翻訳者は決断して自分の見解を示さなくてはならない。これは翻訳者にとつてまことに厳しいことである。そこに、翻訳者の持つ力量がいやでも出てしまう。そういう意味で、本書には翻訳者間野氏の豊かな学識が見事に投影されているということができる。

間野氏は、校訂本の刊行をはじめとする『パール・ナーマ』およびパールに関する研究に対し、ウズベキスタン共和国のパール国際基金よりパール国際基金賞を受賞された。その校訂本の編纂にまさるとも劣らない苦心をされたのが、今回の翻訳本の作成であったのではないかと思う。そうした翻訳上の苦労は、

例えば「春の初めに」という訳がどうして適切かを諸訳本と比較しながら検討しているところ（七三頁脚注）や、「ユルクランの食事」との訳を与えている原文が、実はその読みも意味も不明の語であることを明かして、他説を紹介しながら検討しているところ（三九一頁脚注）を見れば、並々ならぬものであったことが自ずと了解されるであろう。また、当時名文家の名を博したパーブルの臣下シャイフ・ザインがパーブルの名において起草したカーヌワーハの戦いの捷報が全文収録されているが（五〇三—五二二頁）、この長大な勅令調の難解な美麗文が見事な日本語に訳出されているのを見れば、翻訳上の苦労の程に十分察しがつくとともに、訳者の力量の尋常ならざることが容易に解されるであろう。

日本の東洋学の正統派的な伝統のなかにはフィロロギッシュな研究分野があるが、本書の訳業はそうした伝統の上に立つてなされたものであるといえる。しかも訳者は中国文化や漢字文化に関しても深い理解があり、本書でしばしば活用されている『五体清文鑑訳解』の編纂作業にも従事された。カプタル (qatal) を駭翅という適語で訳されるときにも（三〇七頁）、そうした経験が生かされている。

本文の解釈やそれを補強する註釈には、内外の最新の研究成果が援用されている。これらの研究文献を操る訳者の手網さばきは、自由自在の如くである。

第一部から第三部にわたって丹念に付された詳細な注記は、都合三三〇を越えている。これらを合して一書に編めば、優に大部の著書となるであろう。これらの注記のなかには、新書版の書物なら数ページにも及ぶようなものが数多く配されて、語義の蔽

密な解釈や地理的、歴史的事項の説明、先行研究との校勘等がなされている。それらは、訳者の優れたバランス感によって、見事に長短所をえている。例えば、「イラク」や「キュレゲン」に付された注記（二七、二九頁）を読むだけでも、これらの注記の明解さと価値を端的に解することができるであろう。このような注記作成に要した膨大なエネルギーは想像するに難くない。また、訳者が注記で「なお検討の余地がある」と指摘しているところが少なからずあるが、これらは今後の絶好の研究課題ともなるものである。

訳者を『バーブル・ナーマ』の研究に駆り立て、これほどまでに多大のエネルギーの傾注を持續させてきたものは、一体何であろうか。その秘密の一つは、バーブルと『バーブル・ナーマ』そのもののもつ魅力にあるように思われる。

中央アジアのフェルガーナ地方にティムール朝の王子として生れたバーブルは、インドの地にムガル朝を興すことになるが、その生涯は実に波乱に満ちていた。その波乱に満ちた武人の生涯が文人としての才覚を併せもつバーブル自身が、関連した諸事件や見聞した事項を回想して正確、率直に記したのがこの『バーブル・ナーマ』である。ここでは、バーブルのもつ人間的魅力が随所で示されている。ヘラートからカブルに一隊を率いて帰還する際、豪雪中の峠越えの難行（三〇五―三〇八頁）において示されたバーブルの倫理性の高さや、カブル帰還後にバーブルがとった残留者たちの不実に対する度量の大きさ（三一五―三二〇頁）をはじめとして、彼の魅力が活写されたところを枚挙しようとするれば、切りがないほどである。

バーブルの博識と学の深さも傑出している。それは、例えば彼がヘラートのスルターン・フサイン・ミールザー時代のアミールたち（二六五―二七五頁）、学者たち（二七八―二八二頁）、詩人たち（二八二―二八六頁）等に与えた的確な評価を見れば、明らかであろう。

叙述方法は、年を追ってバーブルの事跡を記していく編年体のスタイルを基本にしているが、重要な人物や土地の記述のところにくれば、編年体的記述を一旦止めて、その人物と一族、関係者たちについての記述、並びにその土地の多面的な地誌的記述を集中的に行ない、その後で再び編年体の記述に戻るという方法をとっている。この方法は合理的であり、効果的でもある。

『バーブル・ナーマ』を読んでいると、物資や富の調達方法が、バーブルの活動舞台が中央アジアの遊牧世界から南アジアの農耕社会に移動していくに従って、遊牧民的略奪方式から農耕民的徴税方式へと変化していく様子がよく分かる。バーブルは「このように山から山へ略奪・劫奪しつつ、領地も土地もなくなさまよい暮らしているのは勧められた事ではない」（一五六頁）と述懐しているが、「私は…略奪の仕事に出かけた」（一七〇頁）というように、自ら率先して出かけたたり、部下に命じたりしながら、略奪・襲撃を続けた。故国を追われた彼には、この方法が物資や富を獲得する最も有効な道であった。アフガニスタンに移つても、この方法が基本的には続けられる（例えば二二六―二二七頁）。ただし、カブルを拠点にして豊かなインド世界の一端に襲撃を繰り返すようになると、略奪方式にも変化が見られるようになる。税を課して納めないと、懲罰のために進軍して三百頭の羊を献上

させたり、アフガン諸族の有力者たちを赦して税を羊四千頭と定め、有力者たちには長衣を身につけさせ、徴税人を派遣して徴税したりする方式（三八九頁）である。この過渡的な方式は一五〇七年の第二次ヒンドウスターン遠征計画のころから顕著となるようである。そして北インドを支配下におくようになると、農民から地租として貨幣を徴収する方式が定着するようになる。栄誉の長衣の授与の頒発や謁見の儀式といった皇帝権の威厳を示す装置の複雑化は、このような変化と対応していたようだ。またバーブルの酒宴が増加し、一昼夜にもわたって飲酒を続けるような場合（三九四頁）さえ生ずるようになるのも、この安全で実入りの多い徴税方式への変化と対応していたように、私には見える。

南アジアにおけるムガル朝史研究の中心的位置を占める、インドのアーリガル大学に拠りたいいわゆるアーリガル学派の研究者たちは、総じてバーブル時代への研究関心が比較的に薄いといわれている。確かに、アーリガル学派の研究者たちはアクバル時代からアウラングゼーブ時代までを主要な研究対象の時期とする場合が、圧倒的に多いようだ。何故そうなったのかということについては、いくつかの要因があるのであるが、バーブルのもつ中央アジアの性格の濃厚さや、右に述べた略奪や襲撃、遠征といった事象が、現代インドの社会的少数派としてのムスリム出身者が多いアーリガル学派の研究者たちに、心理的な回避要因となっっていることもあるのではなからうか、と思われる。

それはともかくとして、間野氏による校訂本の公刊をはじめとする一連の『バーブル・ナーマ』研究は、今後南アジア諸国でも一層注目されていくこととなるにちがいない。

我が国でも、近い将来本書が文庫本として再刊され、一般読者にも入手しやすいものとなれば、学界のみならず読書界においても大きな裨益を受けることは間違いないであろう。本書のように原語の多くをカナ表記せざるをえず、ローマ字表記等多用する翻訳書は、漢字表記で事足りるものに比べれば、表記の統一や誤植・誤記の防止のために、その何倍にも相当する注意力を注ぐことが求められる。しかしそれでもなお、万全を期すことは至難の技である。近いうちに文庫版ないし本書の再版が上梓される時には、今回まぎれ込むことを避けえなかつた誤植等を訂正されるよう希望する。その際、むささび（飛びりす 二二二頁）、瀉血（放血 二四三、三三四頁）、ヒンドゥー寺院（仏教寺院 五四二頁）、神像（仏像 五四四頁）等もそれに加えていただけると有り難い。

三

もう一つ気になることがあるので、最後にそのことについて触れておきたいと思う。

『バーブル・ナーマ』では、ヒンドウスターンを概観したところ、インドの伝統的な時の計り方についても紹介している（四六四―四六五頁）。インド人は昼夜をそれぞれ四パル（*parh*）に区分し、また一昼夜を六〇ガリー（*gari*）に区分する。ガリーは時を計るカップ時計をも意味する。すなわち、この容器を水槽に置き、それが水で一杯になると、高みに吊された大皿状の青銅製のガルヤール（*galyar*）を、ガルヤーリー（*galyari*）と呼ばれる人々が叩いて時を知らせる、と。バーブルは、このガルヤール

を叩いて時を知らせる方法に改善を命じ、夜中でも何パフルの何ガリーであるかが容易に聞き分けられるようにした、と述べている。

右の『バーブル・ナーマ』の記述内容から明らかのように、一パフルは三時間、一ガリーは二四分である。パフルはサンスクリット語のプラハラ (prahara) から来たことばで、打、捶打、更、巡などと漢訳される。現代語ではパハル (pahar) と発音される場合が多いようで、二パハル (do pahar 正午、一二時の意)、第三パハル (tisa pahar 午後の意) のように使用される。この用例に見られるように、昼のパフル (パハル) は一パフル、二パフル、三パフル、四パフルという場合はそれぞれ午前九時、正午、午後三時、午後六時を指し、第一パフル、第二パフル、第三パフル、第四パフルという場合はそれぞれ午前六時から九時まで、午前九時から正午まで、正午から午後三時まで、午後三時から六時までを指していたようだ。夜のパフルも同様である。つまり、パフルはもともと三時間毎に刻まれる時刻を意味する場合と、三時間の幅を持つ時間を意味する場合との両方の意味を持っていたように思われる。

『アクバル会典』でも、ガリヤール (ghariyal) について述べたところで、インドの時の計り方を説明し、バーブルの指示した改善策についても触れているので、少し長いがここでそれを紹介しておくことにしよう。

評 書 「ガリヤールは」七種の合金からなるフライパンのような丸い形をしているが、もつと部厚い。大小のものが作られて、吊り下げられる。皇帝の命令がない限り、何人もこれを打ち

鳴らしてはいけない。「これを打ち鳴らすには」威厳さも求められる。インドの賢者は昼夜それぞれを四区分し、各区分をパフルと呼んでいる。「パフルは」大概の町において九ガリー (ghari) より多くはなく、六ガリーより少なくはない。ガリーは一昼夜の六〇分の一である。これはまた六〇に区分され、各区分はパル (pal) と呼ばれる。パルはさらに六〇のビバル (bibal) に区分される。

時の進み具合を知り、これを伝えるために、銅その他でもつて一〇〇ターング (rang 一ターングは二四〇分の一セーブル。アクバル時代のセーブルで計算すると、一〇〇ターングは約二六〇グラム) の重量の容器が作られる。この容器は、古い忠義者が詩で詠んでいるように、ベルシア語ではピンガーン (pingan) と呼ばれる。対句。

この世で汝はどうしようというのか

ピンガーンで計れる間しかないというのにそれは酒杯のような形をしているが、口のところ (tahan) がやや狭くなっており、高さも幅も一二指幅 (angusthi 一アングシユトは約二センチメートル) である。底には小孔が開けられており、そこに重さ一マーシャー (masha 一マーシャーは〇・六五グラム)、長さ五指幅の金の管が通されている。これを、風や振動の妨害を受けないところで、真水を一杯にはった金盃に浮かべる。水で満たされると、一ガリー経つことになる。遠近に知らせるために、かの七種の合金「のガリヤール」が一度鳴らされる。二ガリー経つと二度鳴らされる、という具合である。一パフル経つと、経過したガ

リー教に應じてはじめに打ち鳴らされ、そして一層明瞭に一回ないし四回打ち鳴らされて、何パフルであるかを示される。各パフルが八ガリーの場合、二パフルの時には二六回打ち鳴らされる、というようである。フェルドウス・マカーニー (Firāūs Makarrī) パーブルの諺号) 帝は自らの回顧録 (waq'at) のなかで、次のように述べられている。「パフルが終わって何がしかのガリーが経過すると、そのガリーの数だけが打ち鳴らされて、過ぎ去ったパフルが知らされていないだったので、余はパフル数を少し間をおいて打ち鳴らすように命じた」^①。

また、大阪外国語大学客員教授のタバススム・カーシユミーリー氏より教示を得たウルドゥー語の辞書では、ガリヤール (ghariyāl) について、「真鍮その他でできた円盤で、これを木槌で打って鳴らす。普通、門衛所ないし貴族の邸宅で一時間毎に鳴らす」という説明がなされており、ガリヤールのポウル (ghariyāl ka katorā) つまりガリーの容器については、「底に小さな孔が付けてあるポウルで、水をはった甕にこれを置くと、一時間 (bantā) のうちにポウルは水で満たされる。そのためポウルが沈むと、ガリヤールが鳴らされる」と説明されている。またこの辞書は、「^②パハル (do pahār) を正午とする実に多くの例文も紹介している。

パーブルはパフルに対応するペルシア語のパス (pas) も使用し、昼はパフル、夜はパスと使い分けている場合が多い。これらの用語およびガリーを用いた時間および時刻の表示について、本書では、例えば二パス近く (五四頁下六行) を午前〇時ころ

と注記し、第三パフルの六ガリー (五六六頁下二行) を午前二時一五分と注記し、第一パフル (五七九頁下七行) を午前六時一九時と注記し、夜の第一パフルの六ガリー過ぎ (五九〇頁七行) を午後八時一五分と注記しているように、正確に訳出されている。しかしながら、なかには例えば昼の一パフル時 (五四五頁下五行) を午前六時と注記し、第二パフル (五六三頁八行) を午前九時と注記し、第三パフル (五六六頁下一行、五九二頁一四行) を正午と注記し、夜の三パス (五九二頁下三行) および第三パス (六〇四頁下六行) をいずれも午前零時と注記しているように、理解に苦しむところがない訳ではない。実はここに例示として挙げた対応時刻、時間の表示は、ベヴァリッジの訳書でも同じようになされている。

ベヴァリッジと並んで、本書でしばしば比較、参照されているバケグラモンとサックストンの訳書では、ベヴァリッジのような対応時刻、時間の表示はなされていない。すなわちバケグラモンはパフルをラテン語のヴィジリア (vigilia) に起源をもつヴェイユ (veille) で表わし、ガリーはゲリー (geni) としてそのまま使用しており、一方サックストンは、パフルに対してはヴェイユ同様に更(うつ)の意をもつウォッチ (watch) なる訳語を当て、ガリーはそのまま使用している。こうした翻訳の仕方は、時刻、時間の表示において詳しく欠けるが、ある意味では安全である。ベヴァリッジもウォッチとガリーの用語を用いて訳していたが、同時に対応する時刻、時間も併記していた。間野氏が多く参照したこのベヴァリッジのパフル、ガリーの解釈には、時として正確さに欠けるところがあったように思うのである。

- ① Shaikh Abu'l-Fazl 'Allamī, *Āḥ-i Akbarī*, ed. by H. Blochmann, Vol. I, Calcutta, 1872, reprint, Osnabrück, 1985, pp. 9-10.
- ② Khwāja 'Abdul-Majīd, *Jamī'ul-Lagħāḥ*, 1935, reprint, Lahore, 1989, pp. 1679 & 1028.

(B5判 解題等五二頁 本文七一九頁 一九九八年二月
松香堂 一六〇〇〇円)
(佛敎大學文學部教授)